東北女子大学・東北女子短期大学　紀要　No.50：(11) ～ (21)　2011

高木久蔵の「道中手帳」嘉永三年（一八五〇）について

篠村　正雄*

The Travel Diary of Takagi Kyuzo

Masao SHINOMURA*

Key words：伊勢神宮　Ise Shrine
日記　diary
高木久蔵　Takagi Kyuzo

はじめに

この史料は高木大麓氏の所蔵になるもので、縦一二〇・〇センチ、横一七・五センチ、外表紙を入れて一二一丁からなる。また、この道中のための寺請状、同名の「奉納経」二冊を所蔵する。そのため、「奉納経A」は回国に使用したもの、「奉納経B」は西国三十三観音めぐりに使用したものとして表記する。

高木家は永禄一一年（一五六八）の戒名を持つ先祖を有し、現在で二二代を数えるが、明らかでない歴代もある。歴代が明確になる同家の「従御上様代々被仰付記」によると、仁左衛門は黒石藩飛内村の草分けであり、元禄二年（一六八九）、庄屋になっている。飛内村は黒石津軽家領から元禄二年幕府領となり、同一一年に再び黒石津軽家領となっている。これから数えて四代目長作の寛政七年（一七九五）の伊勢参宮のための寺請状が残っている。また、七代目市左衛門は、安政江戸地震の黒石藩江戸屋敷復興の割当金が在方では六〇両を納める分限者であった。[1] 天保一三年（一八四二）の伊勢参りの寺請状も残っている。

八代目久蔵は、慶応元年（一八六五）、苗字・帯刀を許されて庄屋となっており、明治四年（一八七一）、政府に田地を献納して、黒石知藩事より陣屋内で料理のほか、虎の掛け物・瀬戸の水差しを頂戴している。諱を福久とし、「道中手帳」に花押を据えているところからも、相当の教養を身に着けていたとみられる。

昨年発表した「津軽からの伊勢参宮」の際に未見であったので、嘉永三年の時点での旅の様相を、芦屋村（つがる市）専右衛門が、天明元年（一七八一）、身延参りから京都・大坂を見物した旅を参照にしてみていきたい。[2]

『野辺地町野坂忠尚家所蔵旅日記関係資料上巻』は、盛岡藩領野辺地町の野坂忠蔵が文政一三年（一八三〇）、お蔭参りの流行したときに、京都から伊勢参宮をした記録であるが、下巻が未刊のため考察から除いた。[3]

当時の金・銀・銭遣いを現在の貨幣に換算するのは容易でないが、金森敦子氏が『伊勢詣と江戸の旅―道中日記に見る旅の値段―』で、

＊東北女子大学

天保六年、金一両を銭六貫六〇〇文とし、現在の米の値段に幅があるが一〇キログラムを四〇〇〇円として、一両を六万円、一文を九円と計算しているので、当時の物価を推し量る目安としたい。[4] また、同九年、弘前藩領碇ヶ関では一両が六貫七三〇文で、旅籠賃が一汁三菜で一〇二文であったとする。専右衛門は銭買いを三回している。銭買いは、宿屋に両替屋がきて旅人が小銭に替えることで、金一歩を村上小町で一貫五八五、墨俣で一貫五七〇、知立で一貫五七六文に両替している。ここでは、一両を六貫六〇〇文でみていくことにする。久蔵は銭買いの記録を残していない。

一　旅の目的と同行者

久蔵の旅の目的は、次にあげる「寺請状」に示されてある。

寺請状之事

一、飛内村久蔵与申者、従代々禅宗ニ而拙寺檀家ニ紛無御座候、然処、此度心願ニ而伊勢参宮仕候、諸国御関所無相違御通可被下候、若シ此者病気差合、万一病死之節者、其処之御作法通ニ願上候、寺証文仍而如件、

嘉永三年庚戌三月

奥州津軽黒石　曹洞派　保福寺（黒印）

諸国御関所　御役人衆中

ここでは、伊勢参宮のみ挙げられてあるが、久蔵が参詣した寺社は西国三十三観音めぐりを含めると八四か所を数え、その内四九か所で納経・開帳を行っている。この経費は、合わせて金一両一歩二朱と銭五貫文にもなる。一寺の納経料が平均一二文であるが、納金額の大きさからも、目的は伊勢神宮、高野山と西国三十三観音めぐりにあったことがわかる。

また、「道中手帳」の冒頭に道法・名所を記すとあり、村々間の距離は、丁寧に記録し、行程を一里三六丁で計算している。

同行者は、四月一九日、伊勢で神楽をあげた時に同行六人とある。五月一六日、播州高砂から四国へ渡る時に、工藤常蔵が病気のためか一人下船し、二三日なって備前田口で合流している。常蔵は六月一二日に遠州江尻でも病気になり名前が出てくる。殿付で記されてあるが、久蔵と同じ庄屋クラスの家のものとみられる。六月八日には、東海道御油で身延参りをする川部村の二人と別れ、四人で豊川稲荷宮・鳳来寺・秋葉山へ廻っている。七月七日、黒石上ノ坂を上り、黒石四ツ角で同行三人と分かれ帰宅している。しかし、六月一七日、黒石藩江戸屋敷へ伺う時に六人となっているところから、江戸の宿屋で身延参りの者と合流し、浅瀬石川を渡ったところで川部村の二人と別れたものとみたい。また、昼飯を二人分支払っているのが六回あり、家僕を連れていった可能性も否定できない。

二　寺社参詣

（一）伊勢神宮

伊勢の御師（おんし）三日市太夫は、檀家を松前・陸奥・出羽・越後から江戸・京都・播州・日向まで抱えていた。黒石神明宮の天和二年（一六八二）の棟札に「伊勢三日太夫名代　神主伊勢ノ太夫」とあり、嘉永五年（一八五二）一月四日、御師の名代児玉周吉が、松井半六方に宿をとり、翌日、黒石藩寺社奉行に大麻・のし鮑・新暦を献上。藩では、弘前へ向うための馬一足・長持一棹・雪船一挺・人夫八人を用意している。元治元年（一八六四）には、番頭芳田友吉が献上物を届けている。このことから、御師の回檀があり伊勢信仰を宣布していることが認められる。[5]

久蔵は、四月一九日に三日市太夫次郎の屋敷に入り、手代に神楽料金三歩、山役銭六〇〇文、祈祷料一〇〇文を納入する手続きを済ませている。翌日に屋敷を見物し、「間数数不知多シ」と記しているが、建物が八〇〇坪で部屋数三二室、二八八・五畳であったから、その大

きさに驚いている様子が窺われる。この日は、外宮・内宮を参拝し、朝熊山に登り金剛証寺に参詣後、門前の野間家で万金丹を金五朱で求めている。万金丹は解毒・気付け・腹痛と万病に効くとされ、一粒三文であったので、四五八粒を購入したことになる。外宮と内宮の間の相の山では、三味線を弾きながら銭をねだるお杉・お玉を見ている。

神楽では、「奥州津軽黒石郡飛内村高木久蔵、此家家内安全、子孫長久、家業繁昌」に、「道中安全」を加えて祈っている

御師の接待の豪華さは有名であるので、久蔵が受けた五回にわたる馳走の内容を挙げてみる。

四月一九日　到着した日の夜の膳

本椀（膳）　汁、皿（ナマシ（膾）、坪（黒ノリ（海苔）、半身

二ノ膳　平（かまぐら（鎌倉）海老、角ふう（麩）、志らが大ごん（白髪大根）

猪口　鰹（カツオ）魚ノ差（刺身）身ニ生醤油

中ノ鯛　皿鉢ニ付、吸物そへ（添）ニ香物

四月二〇日

（1）朝飯

御膳　汁、平（大さば（鯖）ニ目巻ふう（麩）

猪口　知花ニけし（芥子）

皿　中ノ鰹魚

（2）神楽後

かわらの盃（土器）ニ而御神酒頂戴、長えの銚子（柄）ニ而

御吸物出、御ちょうし（銚子）、御肴弐種

同行六人、沢山呑、

（3）夫より御膳

本膳　御飯、御汁、皿（なまし（膾）、坪（弐度豆、竹ノ子、ふき（蕗）

ニさがふ（嵯峨麩）

二ノ膳　猪口、小皿（するめ、細工切り、竹ノ子、湯葉、すの（酢）物

三ノ膳　吸物（金頭ニささげ、皿（鰹魚ノ差身、生醤油

八寸　三宝、大皿鉢ニ（釜（鎌倉）ぐら大海老

四月二一日　朝

本膳　御飯、御汁、坪、皿（ナマシ（膾）

二ノ膳　平ニ皿（鰹魚ノ差身

鮑ノ貝ニ則身につけ

中　皿鉢ニ鯛

御師からの馳走は、鰹の季節からか刺身が四回、鎌倉海老の別名を持つ伊勢海老が二回、鯛が二回、酒は飲みきれないほど供されている。半身とあるのは魚であるとみられるが、知花にけしの内容がわからない。奉納金によって料理にはランク分けがあったが、日常生活から考えられぬような内容であったことが理解できよう。

御師からの頂戴物は、御箱祓い一本、奉書のけんの祓い二本、扇子一対、風呂敷一枚、二見が浦ノ盃一箱、御供一包であった。この他に、御祓四〇枚、伊勢守二〇本を用意しているが、これは、親類・村中への配り物とみられる。

この所から、京都より出張している旅籠扇屋庄七の手代に、善光寺以来の荷物を預け、身軽になって初瀬街道を大和へ向けて道中を続けている。運搬料は記していないが、この区間は一貫目（三・七キログラム）で一〇〇～一三二文であった。

（二）高野山

四月二六日に宿坊高野山遍照尊院に到着すると、

夫より風呂ニ入り、夕食前酒肴出、夫々そうめん出、夫々茶づけニ而御飯給

とあり、酒・そうめん・茶づけが出て、二七日の昼食は、

初メハきな粉并小豆附ぼだ餅、猪口ニ太白入、餅をつけ喰申し候、尤平も付、木皿も附、初木瓜喰

と初物の木瓜を食しているが、伊勢での料理とは比べることが出来ないほど質素な内容となっている。

この日、先祖代々の月牌金三歩、祖父母・母の三人分の卒塔婆一本二朱、

親類・村中の物故者一六人分九四文を納めて、供養している。母は二歳の時に亡くなっている。その後、奥の院で長者の万燈に一燈一二文をあげ、弘法大師廟から諸大名の墓所、明智光秀の石碑を廻っている。宿坊で京帷子二反を一歩、紙帷子八反を八〇〇文、血脈八つ、土袋一袋を求め、二八日にここを離れている。

ここでは、先祖と祖父母・母、親類・縁者の菩提を祈っていることがわかる。父市左衛門は、慶應元年（一八六五）に隠居しているので、存命中であり、供養の対象になっていない。

（三）西国三十三観音巡り

西国三十三観音めぐりは、平安時代から行われ、江戸期に関東に及んで、関東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所、合わせて百観音巡りがさかんになった。黒石の竹鼻八幡宮には、正徳四年（一七一四）の百観音巡礼碑がある。[6] また、法眼寺には宝暦元年（一七五一）、西村四郎兵衛の妻が西国巡礼から持ち帰った砂を埋め、その上を歩くことにより巡礼したと同じ功徳が得られるとしてある。[7]

久蔵は、伊勢から初瀬街道を通り、四月二十三日に第八番札所・長谷寺に参詣し、御守一二文、納経料一二文を納めている。

「奉納経B」の最初に「西国第一番　紀伊国なち山　堺参り」とあり、実際には参詣していない。この後の二五日に大峰山に秋田の八人と一緒に案内人を付け、行場を廻っている。これが那智との堺にあたるので、ここからお参りしたことにしていると考えられる。二枚目には、次のようにあって朱印が三顆押印してあり、「道中手帳」の記述と一致する。

勅願所　奉納経
本尊　十一面観世音
戊四月二三日　　大和国長谷寺

また、裏表紙に次のようにある

嘉永三年庚戌年四月廿三日より、六月五日迄ニ参詣相済
奉納西国三拾三所　為家内安全、子孫長久、家業繁昌、二世安楽
南無大慈大悲観世音菩薩
種種重罪五逆消滅、自他平等即身成仏
願主　高木久蔵　行年廿八歳

ここで、久蔵二八歳の旅であったことがわかる。

六月五日には、第三三番・美濃谷汲山華厳寺で、朱印頂戴に六文納めて、三十三観音めぐり打納にしている様子を次のように述べている。

観世音御堂七間四面、仁王門より奥院迄石燈ろう両脇続き多し、此所ニ而御ゆずり代、壱人前三十三文ッ、、両親并私ト三人前ニ而九拾九文奉納、外持参之札ニ朱印戴き六文、納経代一二文、其外、先祖代々之為、御前立之御仏江、御札水ニ而張、此所ニ而長老様壱人頼、御経ヲ読、夫今御えい歌三編んッ、九編ん上ヶ、幸ィ五日之仏様之日ニ当り、誠に難有、西国三十三番打納、此観音夜々ニ出、知(地獄)ごくニ行、御衣ノすそぬれ候由、御本堂の裏ニ水ハこけより出る、谷汲上云水あり、

この日は、天保二年（一八三一）に亡くなった祖父仁左衛門の祥月命日に当たっていて、僧侶に読経を頼み、御詠歌をあげながら感激している様子が窺われる。「家内安全、子孫長久、家業繁昌」は、高木家のためであり、「二世安楽」と「種種重罪五逆消滅、自他平等即身成仏」は、本人が罪障消滅、即身成仏により現世と来世の二世安楽を祈るものであったことが理解できよう。現在でも本堂裏の地蔵尊像に、自分の病気平癒のため経文を書いたお札を貼ることが行われている。また、笈代として軸・御朱印・白衣に押印することが行われているが、これが御ゆずり代にあたるかはわからない。

（四）出羽三山・大峰山・金毘羅山

三十三観音を除いて五一か所の寺社を参詣しているので、その目的と主な寺社をとりあげる。「奉納経B」の裏表紙には、次のようにある。

日月清明

日本巡国神社仏閣為二世安楽
天下和順
尓時嘉永庚戌年三月廿四日大吉日　出立
願主　奥州津軽黒石　中郡飛内村　高木久蔵福久（花押）

この寺社参詣の目的とするところは、自身の二世安楽にあったことがわかる。

○「奉納経B」の最初は、四月二日に羽黒山延命院の朱印を戴いていて、「道中手帳」の記述と一致する。ここでは、納経のほか姿絵二枚、大札、山役銭と合わせて一二一文を納めている。五重塔を見ながら切石段を登り、途中の茶屋で餅五個を喰いながら休んでいる。唐金の大鳥居、御堂は大社で細工は見事であると感想を述べている。

○四月二五日、大峰山には秋田の八人と一緒に案内人を頼んで行場を廻り、一の行場では智恵に魂を入れる行をしている。九重・火難除け・疱瘡・開運の御守りを求め、案内料を合わせると、八七三文を費やしている。太郎・に助にも求めているところから、これは家族・親類のためのものであろう。

○五月一九日、金刀比羅山に登り、結構なところと感想を述べている。奥の院で開帳し、御守に一貫二〇〇文を納めている。他のところでは、御守一つが一二～二〇〇文であるから、一二文であれば一〇〇、一二〇文であれば一〇を用意していることになり、これも旅の配り物とみたい。麓の町で笈箱を一五六文で求めているのは、伊勢までの荷物は、京都の旅籠扇屋の手代に預けているが、その後も多くなり山伏の背負う笈箱を用意したものとみられる。

この旅で、街道沿いの名所は、源平の戦いの一の谷、楠正成の石碑などよく見ている。神戸付近ではこれより入ると布引の滝があると記しているが、実際には見ていない。越後では街道から入った乙宝寺（真言宗）にわざわざ参詣している。

三　名所と三都（京・大坂・江戸）見物

（一）名所巡り

○三月三〇日、象潟では八八の潟に九九森があったというが、今は田地になっていると記している。ここは、松尾芭蕉も訪れた松島と並ぶ景勝の地であったが、文化元年（一八〇四）の地震で一・九メートル隆起し陸地となってしまい、景観が損なわれてしまった様子をよくみている。[8] その後に蚶満寺に参詣し、名所であるとしている。

○四月一〇日に戸隠山に登り、翌日に善光寺で開帳だけを済ませているところから、信仰より名所見物であったようである。

○四月一七日、金の鯱鉾の名古屋城は名城であり、町中は三都に劣らないとみている。

○五月二日は、河内より大和へ入り、当麻寺で中将姫が一夜の内に蓮華の糸で織り上げ、女人の身で極楽往生したという曼荼羅をみてから、法隆寺へ廻っている。翌日は奈良で春日大社、西国三十三観音第九番札所・興福寺南円堂から猿沢池へ出て、鯉・鮒が多いとみている。それより東大寺・二月堂・大仏殿に廻っているが、大仏についての記述がみえない。

○五月五日からは近江八景の内、石山寺・三井寺・竹生島を廻るが、瀬田の唐橋の長さを六四間・一八間と記している。

○五月一五日には尾上で高砂の松とも相生の松ともいう二本の男・女松をみて名所なりといっている。五月二五日には五層の姫路城の二ノ丸門まで入り、誠に名城なりと感想を述べている。

○五月二九日には切戸文殊に参詣し、天橋立で日本の三景で名所なりと記している。

○六月八日には東海道・御油の先で身延参りをする二人と分かれ、豊川稲荷・鳳来寺へ廻っている。翌日、秋葉山の様子を、「委細の儀は、親上京之手帳ニ相違御座無候」とあり、父の道中手帳を持参しながら旅を続けていたようであるが、この手帳は残っていない。

○六月一二日、江尻では、「左り方ニ冨士山、向ふニ相見得申候、誠ニ名山也」と述べている。

○六月一五日には江の島から長谷の観音に参詣している。大仏は大きい金仏なりと記し、翌日は鶴岡八幡宮に詣でている。

○六月二二日、日光の宿屋に、旅籠賃の外に日光山役銭四八文・切手銭一六文・案内銭三二文払っているので、これが見物の費用とみられる。三代将軍家光の廟所は普請中で仮堂であった。前田家の相輪塔・酒井家の五重塔・黒田家のみがき石鳥居等、各大名の寄進物を見て回り、「誠きれい也」とか「誠ニ以日本一ノ御宮なり」という感想を残している。

○六月二九日には塩釜明神から舟に乗って松島を見物している。瑞巌寺は案内人を一人一三文で頼んでいる。

よくもこれだけの名所を精力的に歩いたものと驚くばかりである。

(二) 三都見物

①京都

五月七日、第一四番札所・三井寺に参詣し、東海道を通り、それから第一五番札所・今熊野観音に立ち寄り、京の町を眼下に見下ろしている。最初は三十三間堂の庇の大きさに驚き、方広寺の大仏堂本尊は修復中で加藤清正が朝鮮出兵の時、削ぎ取った敵兵の耳を埋めた耳塚を見て、五条橋から麩屋町の旅籠扇屋庄七に着き、伊勢で預けた荷物を受け取っている。

翌八日は、第一八番札所・六角堂、第一九番札所・革堂、仙洞御所、禁裏を参詣と見物を混ぜながら廻っている。吉田神社では神酒と諸病にきく護符を頂いている。金戒光明寺の本堂前では熊谷直実鎧掛けの松をみている。済園寺は浄土宗の皆上で、日本一の鐘と大門の仁王門があると記しているが、これは知恩院のことであろう。祇園神社、八坂の塔、第一六番札所・清水寺、第一七番札所・六波羅密寺、東西本願寺では「此所細工誠ニ筆にも尽シ難し」と述べている。町中の店出しも見事であると書いている。この日は案内人を頼み、一人一八文負担している。

五月九日は、二条城の堀端を通り、北野天満宮に参詣し、嵯峨から愛宕山へ登り、亀山（亀岡市）へ出ている。

②大坂

五月一二日、大坂に入る手前で旅籠河内屋庄右衛門の手代の出迎えを受け、長町の宿に入り昼飯を頼んでいる。そこから案内人を頼み、天下茶屋、住吉明神の石燈籠の大きさに驚き、堺の妙国寺まで足をのばし、蘇鉄が見事であるとしている。

翌一三日は四天王寺、大阪城では「誠ニ上々の御城なり」と述べている。その後、鴻池善右衛門の屋敷、東西本願寺、芝居小屋三軒をみている。案内人には、合わせて一日半の手当を一人七〇文負担している。

③江戸

六月一七日、江戸城本丸・西丸を船に乗って沖から見物し、その後に大名・旗本の登城風景を見ているが、これは大名小路からであろう。それより霞が関に廻って次のように記述している。

あき様御屋敷御門赤門也、黒田様御屋敷見物、当三月頃焼失ニ而仮ノ黒門なり、尤御門黒門なり、此所あき様与合ノ長屋斗り、廿間位焼ふ(不)申、跡は不残焼失ニ相成、荷(ママ)ニ以大なる屋敷なり、夫より段々行、あだご(愛宕)山参詣、是も焼失、仮ノ御堂なり、此所ニ而休ミ、茶代八文ッヽ、此所江戸町見候得ハ、目ノ下ニ相見得申候、

久蔵が三月頃の火災としているのは、実際は二月五日の火事のことである。[9]『武江年表』によれば、広島藩浅野家上屋敷は無事で、福岡藩黒田家上屋敷・愛宕山本社・増上寺支院の多くが焼けている。久蔵は、浅野家の赤門、黒田家の仮の黒門と残った二〇間の長屋にふれ、愛宕山の仮の御堂をみて、ここから眼下に江戸の町を見物しているが、次

にあげる『武江年表』二月五日の様子と一致している。[10]

巳刻麹町五丁目続き岩城升屋の後なる、高田放生寺の拝借地に在る見守番人の家（炭団屋）より出火して、烟西東南に被り、一時に焼けひろがり（中略）芸州候は別条なし。黒田侯（中略）へ飛んで、（中略）愛宕本社仁王門額堂（中略）焼込み。増上寺は子院数宇焼け（後略）

浅野家では、文政八年（一八二五）、八代斉粛の室に一代将軍家斉の二四女末姫を迎えているところから、赤門があったとみられる。

歌川広重の「名所江戸百景色」の「霞がせき」に浅野・黒田家が描かれてある。[11]嘉永三年（一八五〇）の新刻で元治元年（一八六四）に改正されているので、最初のものでないかもしれない。両屋敷前には門松が飾られ、凧が上がり、漫才・大神楽の姿が見えるので、正月の風景である。江戸切絵図を見ると、両屋敷は東向きに建てられている。[12]右側の黒田家の長屋は白壁で、これが類焼せずに残っていて、久蔵が見たものになる。左側の浅野家の板葺とみられる通用門と、それに板囲いのようにみえる建物が、火災前のものか気になるところである。

増上寺では朱塗りの仁王門の上に、鶴が巣を作っているのを見ている。将軍家の御廟三か所をみてから、永代橋を渡って本所三ツ目の黒石藩江戸屋敷に着き、ここで宿からの案内人を帰している。屋敷の様子を「御門前誠ニ結構なり」と見ている。藩士の福士に土産の菓子箱代として二〇〇文を包んでいる。福士の案内で、弘前藩上屋敷を見物し、「御太鼓やぐら荷ニ高し」と感想を述べている。この櫓は、本所七不思議の一つに数えられているものである。この後に吉原を見物し、「両脇、万燈日中ノ如し」と表現している。福士は、夜一〇時ころに馬喰町の旅籠苟豆屋茂右衛門に送り届けている。

翌一八日、神田明神、湯島天神、上野清水観音、山王宮、浅草観音、猿若町で芝居に入り桟敷で見物し、日暮れに帰っている。

一九日には黒石藩邸に福士を訪ね、茶呑み話をした後に暇乞いをしている。それより、両国橋へ出て、横山町で買い物をして旅籠に帰っている。福士を旦那様とよんでいるが、名前は不明である。この年より三年前の弘化四年（一八四七）の「江戸勝手目見以上役録給分書上」に、江戸詰で奥附・高五〇石・福士文蔵の名前がある。[13]久蔵は、土産の菓子料を持っていき、二時間ちかくも茶呑み話をしているところから、国元で面識があり、相当親しい間柄であるとみられる。しかし、江戸での案内人を帰したあとであるとはいえ、藩士身分のものが夜に吉原を案内し、宿屋まで送り届けている点から、福士文蔵に比定するのには無理があるが、昵懇の藩士が居たことには間違いない。

（三）名物等

名物としては、越後鯨波から登った峠の茶屋での弁慶餅は、四角に切ってあり、やわらかく、砂糖・きな粉を付けて一つ五文で、二〇文支払っている。播磨では、昼飯にひやしそうめんに一六文払っている。東海道・小夜の中山では、飴に餅を付けて一つ五文であった。阿部川では、阿部川餅というしんこ餅に太白をかけた名物一つ五文に一五文払っている。鎌倉の大仏の門前で大仏餅一つ五文に一五文払っている。高野山遍照尊院での昼飯に、きな粉・小豆付のぼた餅を猪口に入っている太白をつけて食べているところから、太白の別名を持つ砂糖が一般化していることがわかる。また、よく餅を食しているが、これは腹もちが良いためであろう。

農作業では、新潟付近で苗代ならしと種まき、名古屋付近では麦刈りの記事がある。

五月二四日に岡山近くの一日市と片上の間で、佐賀藩主の大名行列を見ている。佐賀藩主鍋島直正は、嘉永三年（一八五〇）三月一六日に江戸を立ち、四月二一日に佐賀に着いているので該当しない。[14]佐賀藩の支藩鹿島藩主鍋島直彬は、幼少の上病弱であったので、同じく支藩蓮池藩主鍋島直統が、佐賀藩主と交代で参勤交代する行列のようであるが、裏付ける資料が見当たらない。六月一三日に府中（静岡市）で、鍋島加賀守の行列に出会っている。これは、佐賀藩の支藩小城藩主鍋

島直亮とみられる。[15] 直亮はこの年四月一二日に家督を継ぎ、一一月五日に領内を巡見しているので、国元へ向かう行列であろう。

六月に入ると、厳暑で難渋している記事が見え、同二〇日、春日部では、「厳暑ニ付、御宮ニ入休息致し」と暑さに苦しんでいる様子が窺われる。同二八日、仙台までの間に足を痛め、翌日、塩釜までは一〇〇文で馬に乗っている。七月一日には、「足はれ、誠ニ難渋致し」とあり、足の痛みに困っている様子が見て取れる。同四日には盛岡を発ち、寺田から山坂が難所のため、二五〇文で馬に乗っている。馬に乗っているのは五回を数える。病気は、小蛸を食した時と食物で下痢をした二回だけである。

宿屋の宿泊は一夜だけが認められてあり、病気・商用で二夜以上逗留する場合は、宿屋より町・村役人に届け出る義務があった。一〇二日の旅で連泊しているのは、江戸四泊、伊勢三泊、善光寺・大峰山・高野山・京都・大坂二泊で、他は連日歩き詰めである。二七歳の若さであっても、旅の終わりの方では足を痛めていることがわかる。

四　関所と川渡り

（一）関所と口留番所

この旅に関する江戸幕府の関所と、各藩の口留番所を順を追って示すと、次の表のようになる。

弘前藩領碇ヶ関では、旅籠で出切手一二〇文、宿袴料六〇文を支払っているが、宿袴料が何かはわからない。帰りは、濁川の番所に役銭二四文を払い、碇ヶ関で役銭三〇文を払って入っている。秋田藩長走では、出切手六〇文を払い、城下を出た番所へ提出し、ここでは別に役銭六〇文を払っている。中山道の本山（塩尻市）は、享保一〇年（一七二五）、松本藩領から天領となったが、松本藩預地であるため、同藩が番所の管理に当たっていた。若狭街道の若狭と近江の境の山中（マキノ町）は、旗本朽木氏の所領で主に女性を取り調べたという。箱根関所では「誠ニ厳敷所」と物々しい警備の様子を記している。奥州・日光道中の栗橋関所は、正式には房川渡中田関所といったが、関東郡代伊奈氏の下にあり、入鉄砲と出女を取り締まったが、久蔵は何も記していない。[16]

このように見てくると、役銭を徴収しているのが、弘前・秋田・庄内・村上・仙台・盛岡の六藩になる。

芦屋村専右衛門の天明元年の身延参りは、鰺ヶ沢（鰺ヶ沢町）から善光寺・身延山に参詣し、万沢の追分から駿河へ出て、京都・大坂・江戸を見物している。弘前藩の大間越関所の記述はなく、秋田藩領に

（表）関所・口留番所

関所・番所	幕府・藩	役銭	備考
碇ヶ関	弘前藩	出切手 120	宿袴料 60
長走	秋田藩	出切手 60	
久保田城下端	秋田藩	役銭 60	
かずら根	亀田藩	なし	
女鹿	庄内藩	なし	北の人改め番所
吹浦	庄内藩	なし	人の手形改め
（鶴ヶ丘）	庄内藩	役銭 30	酒田で切手取り忘れ、宿より切手
鼠ヶ関	庄内藩	なし	出切手を渡す
塩谷	村上藩	手判役銭 10	庄屋発行、番所で手判を押す
八峠の下	高田藩	なし	
高田城下	高田藩	なし	入口・出口
松本城下	松本藩	なし	入口
瀬場	松本藩	なし	出口
本山	幕府	なし	幕府領松本藩預地、松本藩管理
熊川	小浜藩	なし	
山中	幕府	なし	若狭・近江境
箱根	幕府	なし	小田原藩管理
栗橋	幕府	なし	関東郡代伊奈氏支配
越河	仙台藩	役銭 12	
相去	仙台藩	なし	仙台・南部境
下鬼柳	盛岡藩	役銭 200	
田山～湯瀬	盛岡藩	役銭 120	
濁川	秋田藩	役銭 24	
碇ヶ関	弘前藩	役銭 30	

入り、八森の番所で役銭三〇文を払っている。庄内藩酒田で手判に三〇文を出している。高田藩の関川・駿河との境の甲斐の万沢では役銭がなく、東海道新井の関所で役銭二〇文であった。仙台・盛岡藩境の水沢では役銭なしで通り、盛岡藩の折壁で一〇文払い、小坂から山越えしている。碇ヶ関で役銭三〇文を払っている。久蔵の方と比べると、このうち酒田と帰途の碇ヶ関が同額である。

弘前藩領では、安永二年（一七七三）、秋田藩沼田村の左之助ら六人が、大間越の宿一五郎から入切手二枚を一枚四五文で入手し、小泊港の問屋孫助に渡している。また、安政二年（一八五五）、三奉行より問屋・宿屋に対し、入切手・旅籠帳を厳重に吟味するよう布達をだしている。同年、郡奉行より九浦奉行・湊目付に、松前渡航の者が入切手に記された湊から出ないときは、町役・村役が訳を書いた手紙を添えること、湊より入る者の水揚切手は、領内をでるときの関所名を記入させるようにした。[17]

このことから、弘前藩では領内に入る時に入切手を宿屋に作成させ、それには出口場所を記入させて、旅人を管理していると考えられる。旅人にとって奥州は、旅の設備不足に加えて、役銭徴収が難儀であったろう事は理解できよう。

（二）川渡り・舟渡り

川渡りは三二か所であり、内二か所は蓮台渡しを利用している。大井川では、川蓮台に一人三四〇文払っている。次の瀬戸川では、二〇文で背負ってもらい、別に酒代八文を出している。阿部川は加水で川留めになり、しかたなく午後二時頃に旅籠に入っている。翌日も「加水ニ而人ノ首きりニ而早川なり」と記述しているほどの増水で、蓮台越に二六四文払っている。福知山では巡礼者の川渡りは無銭であった。

舟渡りは三八か所であり、四国金毘羅への船賃は往復で金二朱、賄いが五七文、布団借用が五二文であった。

橋銭は六か所。橋が洪水で流され、こぎ渡りが四か所あった。草鞋を脱いで浅瀬を探し、徒渡りするのは予想以上のものであったろう。

黒石では浅瀬川の川渡し賃が二文であった。

川渡り・舟渡り・橋銭の費用が、四国への乗船を除いて二二二五文になる。

芦屋村専右衛門の川渡り・舟渡りは、二四回で七〇九文を要している。大井川では舟賃が一三五文、阿部川では川渡りに七五文払っている。

五　伊勢参りの白犬

この旅は、久蔵にとって先祖供養と自身の二世安楽にあり、関心は道法と名所にあった。そのため、同行六人の内、名前がわかるのは病気の工藤常蔵だけで、川部村の二人は途中から身延参りに別れているため、日蓮宗の信者とみられるのみである。

この時に白犬を連れていったという記録が一言もない。しかし、嘉永四年（一八五一）五月一九日の「西谷平兵衛日記」に、秋田藩森川監物が、江戸の付近でまとわりつく白犬の首に、二〇〇文と御幣に津軽黒石とあるのを見て秋田まで連れ、宿送りで黒石の名主松井斎兵衛に届けたとある。[18]森川は秋田藩用人で、四月二三日に江戸を発ち国元へ向かっていることがわかる。[19]また、「永代日記」には、奥州・日光街道の幸手より連れ帰ったもので、飛内村のものが伊勢参りに連れていったとある。[20]「合浦奇談」には、三年ほど行方知れず、黒石に着いてから三・四カ月過ぎてから飼い主があらわれたとある。[21]史料に信頼性の差があるが、飛内村の者が白犬を伊勢参りに連れてゆき、三年ほど行方不明であったが、秋田藩用人森川監物が幸手より連れ、秋田より宿送りで届けたという点は抑えることが出来よう。

久蔵は、六月二〇日に幸手の旅籠平右衛門方で昼飯付を頼んだが、「昼飯壱盃[杯]斗より持参不申、色々掛合いたし候」とあって、昼飯のこ

とで揉めたことはかいてあるが、白犬の記述はない。幸手は利根川の手前で、白犬だけでは渡れないので、一一か月ほどこの付近で生き延びていたものであろう。

歌川広重の「伊勢参宮　宮川の渡し」に、御祓いと銭を首に結び付けた白犬の後ろ姿が、抜け参りの少年と共に描かれている。[22]

久蔵はこの絵のように白犬を伊勢参りに連れていき、幸手付近で見失ったものと考えたい。

おわりに

黒石では上の坂を登り、前町通りの煮太茶屋で昼飯をとった。近隣二双子村から買い物に来ていた人に会い、酒肴を振舞い、一人一匁五分を支払っている。ここだけが銀遣いをしているが、その理由は不明である。旅の終わりで、はばき脱ぎをしたものであろう。その後、黒石四ツ角で同行の三人と分かれ帰宅している。一〇二日間にわたり、踏破した距離が、一里三六丁として、九九二里二八丁になる。要した費用は、本人が旅籠賃は一八貫三九四文で、銀で三〇六匁七分二厘と計算しているだけ他は記していない。「道中手帳」に記してある金額から、関所の役銭が八一六文、川渡り・舟渡り賃が二二二五文と四国往復の金二朱、寺社参詣が五〇〇〇文と金五歩二朱、食事に一五四七文、その他の経費が二〇八四文となる。これの合計が銭三〇貫六六文、金一両三歩一朱、銀一匁五分になる。

専右衛門の場合、報謝宿に三八泊しているが、これは、同じ日蓮宗の寺院や信者を頼っているものとみられる。木賃宿に四七泊しているが、料金に五～七〇文の幅があり、米は三五～八〇文の幅で三六回買っており、計三九二二文になる。旅籠に四泊しており、五〇～二五〇文の幅があり、計六六二文になる。関所・番所の役銭は一二〇文で、川・舟渡しが七〇九文になる。これらの合計が五四一三文になる。この外、身延山奥の院で納骨料三〇〇文、開帳料一五文を納めているが、これは前年亡くなった父親の納骨とみられる。報謝宿を頼っても、約六〇〇〇文を要していることがわかる。

一八世紀にイギリスの貴族の子弟はグランドツアーに出かけて行った。それは、教育の仕上げとしての旅で、数か月から二年に及び、勇気や礼儀作法を学ぶ絶好の機会であり、家庭教師を伴うこともあった。久蔵にとっては先祖供養と自身の二世安楽を祈る旅であり、いずれ庄屋を務める為の準備として、見聞を広めるグランドツアーであったことが理解できよう。

註

(1)「永代日記」高橋幸江氏蔵。
(2) 拙稿「津軽からの伊勢参宮」(『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』第四九号、二〇一一。
成田耕治「芦屋村専右衛門旅日記」(『弘前大学国史研究』第一一八号)二〇〇五。
(3)『野辺地町野坂忠尚家所蔵旅日記関係史料上巻』、(みちのく双書第五四集)、青森県文化財保護協会、二〇一一。
金森敦子「上方への旅―盛岡藩物産方野坂忠蔵の旅日記から―」(『東奥文化』第八二号)、二〇一一。
(4) 金森敦子『伊勢詣と江戸の旅』、文春新書、二〇〇四。
(5) 黒石神明宮蔵棟札。『黒石市史資料編Ⅱ』、黒石市、一九八六。
(6)『黒石市史通史編Ⅰ』、黒石市、一九八七。
(7) 右同書。
(8) 長谷川成一『失われた景観―名所が語る江戸時代―』、吉川弘文館、一九九六。
(9)『江戸町触集成』第一六巻、史料番号一五〇三四。塙書房、二〇〇一。
(10)『増訂武江年表』(東洋文庫)、平凡社、一九六八。
(11)『広重の大江戸百景散歩』、人文社、一九九六。
(12)『嘉永・慶応江戸切絵図』、人文社、一九九五。
(13)『黒石市史資料編Ⅱ』、黒石市、一九八六。
(14)「直正公御年賦地取」(『佐賀県近世史料』第一編第一一巻)、佐賀県立図書館、二〇〇二。『鍋島直正公伝　年表　索引　目録』、侯爵鍋島家編

纂所、一九二一。
野口朋隆『江戸大名の本家と分家』、吉川弘文館、二〇一一。
(15)「直正公御年賦地取」（『佐賀県近世史料』第一編第一一巻）、佐賀県立図書館、二〇〇二。『藩史大事典』、雄山閣、一九九八。
(16) 福井敏隆「栗橋関所史料にみえる弘前藩・松前藩等の動向」（『市史研究あおもり』第八号）、青森市、二〇〇六。
(17) 拙稿「弘前藩における旅人の死の取り扱いについて」（『年報ひろさき』第一〇号）、弘前市企画部企画課、二〇〇一。
(18) 青森県立図書館蔵。
(19)『宇都宮孟鋼日記』、秋田県、二〇〇八。
(20) 註（1）前掲書。
(21) 弘前市立図書館蔵。
(22) 註（4）前掲書。